

旧聞日本橋

蕎麦屋の利久

長谷川時雨

青空文庫

角の荒物屋が佐野吾八さんの代にならないずっと前——私たち
まだ宇宙にブヨブヨ魂が漂^{ただよ}っていた時代——そこは八人芸の○○
斎という名人がいたのだそうで、上げ板^{あいた}を叩^{たた}いて「番頭さん熱い
よ」とうめ湯をたのんだり、小唄^{こうた}をうたったりすると、どうして
も洗湯^{おゆや}の隣りに住んでる気がしたり、赤児^{こども}が生れる泣声に驚かさ
れたりしたと祖母がはなしてくれた。

この祖母が、八十八の春、死ぬ三日ばかり前まで、日髪^{ひがみ}日風呂^{ひぶろ}
だった。そういうと大変おしやれに聞えるが、年寄のいるあわれ
つぽさや汚^{きた}ならしさがすこしもなく、おかげで家のなかはずがや
かだった、瘦^やせてはいたが色白な、背の高い女で、黒じゆすの細

い帯を前帯に結んでいた、小さいおちよこで二ツお酒をのんで、田所町の和田平か、小伝馬町三丁目の大和田の鰻の中串を二ツ食べるのがお定りだった。

祖母のお化粧部屋は蔵の二階だった。階下は美しい座敷になっていたが、二階は庭の方の窓によせて畳一畳の明りとり格子がとつてあり、大長持やおながもちやたんすその他の小引出しのあるもので天井まで一ぱいだった。中央の畳に緋毛氈を敷き、古風な金の丸鏡の鏡台が据てあった。

三階の棟柱には、彼女の夫の若かった時の手跡で、安政三年長谷川卯兵衛建之——と美事な墨色を残している。その下で八十の彼女は、日ごとに、六ツ折りの裾に絵をかけた障子屏

風を廻らし黒ぬりの耳みみだら 鹽しほを前におき、残っている歯をお歯
 黒で染めた。銭亀ぜにがめほどのわりがらこに結つて、小楊子の小々太
 い位なのではあるが、それこそ水の垂れそうな鼈べつこう甲なかにぎしの中差と、
 みみかきのついた後差うしろざしをさした。鏡台の引出しには「菊童きくどう」
 という、さらりとした薄い粉こな白粉と、しょうえんじがお皿に入
 れてあつた。鶏卵たまごの白味を半紙へしいたのを乾かして、火をつけ
 て燃して、その油燵ゆくんをとるのに、元結もとゆいでつるしたお小皿をフラ
 フラさせてもたせられていたことがあつた。ある時、お皿の半分
 だけしか真黒まつくろにならなかつたが、アンポンタンらしい理屈を考
 えた。どうせ、毎日おばあさんが拭ふいてゆくのだからと——今思
 えば、それが眉墨まゆずみであつたのだが——

祖母は身だしなみが悪い女を叱つた。

「おしやれではないたしなみだ、おれは美女だと己惚れるならおやめ。」

文化生れのこの人は、江戸で生れはしなかったが、江戸の爛熟期の、文化文政の面影を止めていた。万事がのびやかで、筒つぽのじゅばんなど、どんなに寒くても着なかった。

ある年九月廿日、芝の神明様のだらだら祭りに行くので、松蔵の俤に、あたしは祖母の横に乘せられていた。紺ちりめんへ雨雲を浅黄と淡鼠で出して、稲妻を白く抜いた単に、白茶の唐織を甲斐の口にキュツと締めて、単衣には水色太白の糸で袖口の下をブツブツかがり、その末が房になってさがっているの

を着ていた。ひかげちよう日陰町のせまい古着屋町を眺めながら、ある家の山のように真黒な、急な勾配こうばいをもった大屋根が、いつも其処そこへ来ると威圧するように目にくるのを避よけられないように、まじまじ見詰みつめながら通った。

祖母は伊勢朝長あさおさの大庄家の生れで、幼少な時、童わらべのする役を神宮に奉仕したことがあるとかで神明様へは月参りをした。よくこの人の言ったのに、五十鈴河いすずは末流すえの方でもはいつてはいけな
い、ことに女人はだが——夏の夜、そつと流れに身をひたすと、山の陰が抱いてるように暗いのに、月光つきは何処どこからか洩もつてきて浴あびる水がキラリとする。瀬せが動くと、クスクスと笑うものがある
ので、誰と低くきくと、あたしだよと答えるのは姉さんで、そつ

と這^はうようにして上陸^{あが}る――

その折こ^うも言^つた。香魚^{あゆ}は大きい、とつてきてすぐ焼くと、骨がツと放れて、その香^かのよいことと――

あたしは先年、神路山^{かみじやま}が屏風のようにかこんだ五十鈴河の見たらしの淵^{ふち}で、人をおそれぬ香魚が鯉より大きく肥^{ふと}っているのを見た。昔は、そのおちこぼれが、伊勢の人に香よき自慢の香魚を与えたのであろう。

帰途^{かえり}は、めっかち生芽^{しょうが}とちぎ箱^{ばこ}がおみやげ、太々餅^{だいだいもち}も包^つまれている。で、この祖母の道楽は、彼女の掴^{つか}んでいた道徳は、一視同人ということで、たまたまの外出はその点で彼女を自由にさせくつろがせたものと見える。また、彼女の気性を知っている者た

ちは、逆らわずにそのままに彼女の厚意をうけいれた。

「御隠居さん、今日は松田ですか？」

くるま

俵の上と下で、帰りのお夜食の寄りどころが定まった。お夜食といっても五時になるやならずであろうが——そこで。京橋ぎわの（日本橋の方からゆけば京橋を渡って）左側、料理店松田へ寄った。巾の広い階子段をあがって二階へ通った。

はば

はしごだん

「松さんはよいものをおとり。」

かおなじみ

顔馴染の女中さんは、ニコニコしてなるたけ涼しいところへ座らせようと、莫座の座ぶとんを持ってウロウロした。どの広い座敷も、みんな一ぱいなので、やっと、通り道ではあるが、縁側についたで垣をつくってくれた。

八十に近い祖母と、六ツ位の女の子と、松さんとは親密にくるま車座ざになった。祖母のお膳ぜんには大きな香魚あゆの塩焼おどが躍っている。

松さんは心おきなく何か一生懸命に話したり願ったり、食べたりしている。あたしが所在なくしていると、若い女中が来て、噴水の金魚をごらんといった。

松田はいろんなことで有名になっているが、噴水と金魚もたしかによびもののひとつであつたのであろう。あたしは余念なく眺めていたが、

「嬢じよつちゃん、早くこちらへ来て——」

と顫ふるえた声で言った女中さんに引っぱられて祖母のいる場処へかえつた。

と、どうした事か、他の女中がお膳をはこんで裏二階の隅の方の室^{へや}へ席をうつそうとしているところだった。近くにいた支那人の一^{ひと}団^{かたまり}が、喧^{やかま}しくがやがや言つて席を代えさせまいとしたが、祖母はグングン傍^{そば}を通つていった。

別の部屋へかわつてからも、隣席の人たちが妙にあたしを見て、首をひねったり、何かいったり、うなずいたりした。帰りには、松田の人たちに守られて、俵^{はたけ}のおいてある裏口の方から出された。「大丈夫です。みんな表梯子^{ばしご}の方ばかり見張つていますから。」と送り出した人たちは言った。松さんは大急ぎで俵^{はたけ}をひいて駈^{かけだ}出した。

「おそろしやおそろしや、この子を支那人^{なんきん}が浚^{さら}おうとして——」

と、俵をおりると祖母は家の者に言った。

赤ん坊のころ、若い母親の不注意から、釣^{つり}らんぷの下へ蚊帳^{かや}を釣^つて寝させておいたら、どうした事か洋燈^{ランブ}がおちて蚊帳の天井が燃えあがつた。てつきり赤ん坊は焼け死ぬものと誰もが思ったが、小さい布団^{ふとん}のまま引摺^{ひきず}り出されて眠っていたという子は、支那人の人数い難から逃れたのだった。そのアンポンタンが、どうした事か音に好ききらいが激しくつて、蕎麦屋^{そばや}のおばあさんを困らしたが――

丁度ここに、いつぞや『婦人公論』へ書いた短文をはさもう。

隣家の蕎麦屋で粉こなをふるう音が、コットンコットンと響いてくると、あたしは泣出したものです。住居蔵ろじの裏が、せまい露地ろじひとつへだてて、そばやの飛離れた納屋なやがあつたので、お昼過ぎると陰気なコットンコットンがはじまる。神経質な子供だつたと見えて昼寝していても寝耳に聴附あとけて泣出したのです。両親や祖母が困つたと言つていたのは、後日あとできいた思出でしょうが、そのふるいの音も厭いやだつたに違いありませんが、その家全体が子供心にきらいだつたのではないかと思われます。どうも暗い小さなそばやらしかつたのです。「利久」といつて、主人になつた息子とお媼ばあさんだけで、そのお媼さんが、骨だつた顔の、ボクンとくぼんだ眼玉がギョロリとしていて、肋あばら骨ほねの立つた胸を出して、

おおはだ
大肌ぬぎで、真ま暗くらなところに麵めん棒ぼうをもつてこねた粉をのば
していると、傍に大釜がまがあつて白い湯気が立たち昇のぼつていたり、ま
た粉をふるつている時は——宅の物置のつづきのさしかけで、角かど
の小さな納屋の窓から、そのお媼おばあさんの皺しわがれた肩には、汚きたない
濡ぬれ手てぬぐい拭ぬぐが肩掛のように結びつけられてあつて、白髪しろがみまじりの
毛がそそげ立つて、斑まだらにはげた黒い歯で笑われると、とても泣か
ずにはいられなかつたのです。夏の、重おもつくるしい風のない蔵座
敷のなかに寝せつけられて、そのコットン、コットンをきくとき
つと泣出した覚えはあつても、それが火のつくような泣方で、手
もつけられなかつたときくと、今ではその媼おばあさんに気の毒な気が
しますが、じきにその媼おばあはコレラで死んでしまつて、その店もな

くなつてしまいました。

ある時、祖母の従兄だいとこというおじいさんが伊勢から訪ねてきたことがありました。おじいさんはもう九十歳だといいました。祖母は八十ばかりでした。この二人は人世五十年以上逢わなかった様子で、しきりに懐しがつていました。わたしはそのおじいさんの赤とんぼ位のちよんまげ髷が、光った頭にくつついているのを、西洋人を見るより珍らしく見ていました。二階の広間で御馳走ごちそうをして、深川でもと芸者をしていたという二人の血びきのおたけさんという女を呼んで、人交ぜひとまぜしないで御酒を飲んでいましたが、やがておじいさんが太鼓たいこをたたき、女のひとが三味線を弾いて、祖母が踊りはじめました。子供は行くのでないといわれて、そつと

梯子段はしごだんのところから覗のぞいていると、しまいには二人の老人が浮れて、伊勢音頭おんどを踊っているかげが、庭にむかった、そとの暗い廊下の障子にチラチラと動いていました。その手ぶりのよさ——わたしは最近伊勢の古市ふるいちまでいって、備前屋で音頭を見せてもらいましたが、とてもとても、幼目おさなめにのこる二人の老人のあの面白さは、面影も見ることが出来なかつたのです。

こんな事を書いたらまだいくらかもあるでしょうが、町で生れた子には、自然からうけた印象のすけないことがものたりません。

利久の納屋はあたしの家の物置と一ツ棟むねで、二ツに仕切つて使っていた。丁度庭裏の井戸のところに窓があつて、井戸をはさん

での釜場かまばになつていた。

激しいコレラの流行はやつた最終だというが、利久はお媼ばあさんがコレラで死ぬとすぐに倒産つぶれた。万さんという息子は日雇人夫ひようとりになつたが、そののち、角の荒物屋へ酔つて来ていた。焼酎しょうちゆうをう

んと飲んで死んだと、荒物屋佐野さんの十三人目の、色の黒い、あぶらぎつた背虫のように背を丸くしたおかみさんが宅うちへ知らせに来た。佐野さんは時々面白い話をした。おかみさんをとしかえるたんびに、だんだん悪くなつて、こんな汚ない女にととうなつてしまつたといつた。そういわれても怒らずに、おかみさんは、糊のりを煮ていた。お天気の良い日、朝の間に、御不浄ごふじようの窓から覗くと、襟の後に手拭を畳んであててはいるが、別段たばの油が着

物の襟を汚すことはなさそうなほど、丸くした背中まで抜き衣紋えもんにして、背中の弘法こうぼうさまのお灸きゅうあとや、肩のあんま膏こうを見せて、たすきがけでお釜の中のしめ糊を掻かき廻していた。※とした看板がかけてあつて、夏の午前あさは洗濯ものの糊つけで、よく売れるので忙しがっていた。平日ふだんでも細い板切れへ竹づつぽのガンクビをつけたのをもつて、お店から小僧さんが沢山買いに来た。

コレラは門並かどなみといつてよいほど荒したので、葛湯くずゆだの蕎麦そばがきだの、すいとんだの、煮そうめんだの、熱いものばかり食べさせられた。病人の出た家の厠かわやこわは破こもして莛こもをさげ、門口へはずつと縄を張つて巡査が立番をした。

深川芸妓だったおたけさんもコレラで死んだ。背の高い、反そり

身な、色の白い、額の広い女で祖母の姪めいだけに何処どこかよく似ていた。辻車に乗って来て、気分がわるいと言った。それなら早く帰る方がよいだろうと、その車で出たが、車屋がすぐ引返ひっかえしてきて、お客様が変だとおろした。

門から這入はいって、庭を通って来て、渡り縁に腰をかけたが、今出ていった時とは、すっかり相恰そうごうが變つて、額を紫っぽく黄色く、眼はボクンと落ちくぼみ、力なく見開いている。なぜ引返したといつても辻車では仕方がなかった。住居は遠くもない鉄砲町なので、車夫は沢山のお礼をもらつて病人を送つていった。

幾日かたった。おたけさんの開いていた氷屋の店は、ガランとして乾いていた。軍鶏屋しやもやをはじめたのがいけなくなつて氷店にな

ったのだった。道楽ものの兄が二人いたが、その一人と母親とが伝染て、二、三日のうちに三人もいなくなってしまった。

この西川屋一家も以前は大門通りに広い間口を持っていた。蕎麦屋の利久の斜向いに——現今でも大きな煙草問屋があるが、

その以前は、呉服用達しの西川屋がいたところである。その主

人はあたしの祖母の兄で、早くから江戸に出ていた。先妻に縹

緞よしの娘を生ませたが、奥女中上りの後妻が継いじめをす

るので、早くから祖母の手にひきとられ、年下のあたしの父の許

いならずけ
婚 となつた。

後妻は由次郎、鉄五郎、おたけさんを生んだ。父親が歿なると、男振りのよい忤たちは直に店をつぶしてしまった——尤もそれに

は御維新の瓦解がかいというものがあつた故せいもあろうが——二人の忤せはありつたけの遊びをして、由次郎はコレラでなくても長くは生きないようになつていた。

鉄さんが鉄公になつたところは散々で、もう仕たい三昧ざんまいの果だつた。賭博場ばくちばを軽げ歩き、芸妓屋の情夫にさんになつたり、鳥料理の板前になつたり、俵宿の帳附けになつたり、頭かしらの家に厄介になつたり、遊女おいらんを女房にしたりしているうちに、すっかり遊人風になり金がなくなると、蛆虫うじむしのように縁類を嫌がらせた。

この男、あたしの目に触れだしたのは、越前堀えちぜんぼりのお岩稲荷いなりの近所に何なにかに囲われていたころだつた。染物屋この張場はりばのはずれに建つた小家で、茄子なすの花が紫に咲いていた。白っぽくつて四角

い顔のお婆さんが、鉄の悪口をグシヨグシヨと祖母に語っていた。でも、その時分鉄さんは、父に用事を言いつけられると、ヘイ、と分明^{はつき}り返事をして、小気味よく小用をたしていた——尤もむずかしい仕事ではない、家のなかの雑用だが——彼は見かけだけは稜^{りようりよう}々たる男ぶりだった。ちよつと類のすくない立派な顔と体をもっていた。面長な顔に釣合つた高い鼻、大きなきれの長い眼、一口に苦味走つた男だったが、心根は甘かつたものと見える。母親が、夜になると忍ぶようにして勝手口からたずねてくると、祖母の膝^{ひざ}の前にうずくまつて恵みを願っている。その女が帰つてしまふと祖母は溜^{ためいき}息をついて、

「えらい女^{ひと}をもらつてしまつて、あの女^{ひと}のために西川屋もつぶれ

た。あの女の心がけがわるいからだが——」

だが、奥女中姿の裨^{かいどり}掛で嫁に來た時はうつくしかつたと、不便^{みづ}がつて貢いでいた。

ある日祖母は、例によつて私をつれて、山の手の坂のある道を行つた。富坂というところだと松さんは言つた。露路へはいりながら、しどい場^{ところ}処ですといつて番地と表札をさがしたが、西川鉄五郎の家はどうしても知れないので空^{あきや}家のような家で聞くと、細かい声で返事をした。

「此^{ここ}処でございます、此^{ここ}処でございます。」

祖母は松さんに手をとられてはいつていつた。畳もなければ根^ね太も剥^はいである。

「御隠居いんきよさん」

戸棚を細目にあけてそう言ったのは、二、三日前の晩、
絆纏はんでんを紐ひもでしばって着てきて、台所で叱られていた女だった。

「座るところはなくともよいから出ておいで。」

祖母はそう言ったが、やがて、モゾモゾと半裸体の女が這はい出てきた。

「やれやれ、まあ！」

呆あきれた祖母は、俵に乘せてきた包みを松さんに取りにやった。

「お前をそんなにして投ほうりだしておいて、鉄の人非人どこは何処どこへいった。」

という、ふんどしふんどし、褌ふんどしひとつで戸棚から、

「面目も御座ございません。」

と這出してきた。そして、祖母が救いに來たのだと知ると、一昨日の晩、女が死ぬような病気で、どっと寝ておりますといったのは、二人ともすつかり忘れてしまつて、裸でも元氣な調子でともかくやりきれないという事を、子供のあたしにも面白くきかせるほど巧みにしゃべりたてた。

「よし、よし。貴様はのたれ死しようと勝手だが、女子おなごはそうはゆかぬ。」

祖母がいるうちに、米屋からは米がはこばれ、炭屋からは炭がきた。松さんが運んだ包みから出た着物を女は着た。

鉄さんは景氣よく根太のつくろいをして、戸棚の中に敷いてい

た花^{はなむしろ} 薙をおき、松さんは膝掛け^{ひざか}を敷いて祖母とあたしのいるところをつくつた。

こんな処へ来ても、人ぎらいをしない祖母は、てんやから食^{たべも}物をとつて、みんなで会食した。酒が廻ると鉄さんは、どんなふうにして大屋をこまらせてやったとか、畳は売つてしまつて、根太は薪^{まき}のかわりに燃したと雄弁にまくしたてて叱られた。

家にかえつても何にも言わないので、祖母はあたしを可愛がつた。妹は外でおとなしく、帰るとすぐ告げ口をするので、猫かぶりだといって、いつもおいてきぼりにされていた。言いつけ口は嫌いだが、決してもの事を隠しだてするひとではなかったから、帰るとすぐその晩か、遅くもあくる夜は、松さんの俵が荷物ばか

りを積んで、再びなまけ者の住居を訪れるのだった。

「無駄だけれど——」

と言いながら母は布団ふとんやその他のものを積ませた。

だが、鉄さん自身が浅間あさましい姿で、地虫のように台所口につく

ばった時、祖母は決してゆるさなかった。同情の安売りはしなかつた。

取次ぎが、ぜひ御隠居様にお目にかかりたいと申もうしますと伝えたととき、台所の敷居に手をつくようなことをせず、表から来い

と言わせた。

彼女は卑屈を嫌ったが、決して貧乏を厭いはしない。ところが、

哀れな鉄さんは、卑屈をいやしまず貧乏を鼻はな白しろんだ。彼は何時いつ

までもウジウジ屈かがんでいた。祖母は堪たまらなくなつたと見えて台所

口へゆくひしやくと柄酌ひしやくに水をくんで鉄さんの頭からあびせかけた。

「とつととゆけ、用があらば伯母おばの家だ、表からはいれ。」

そう怒鳴どなった。ブツブツ口小言をいつていた母が、かえつて気の毒がつて小錢を与えたりした。

鉄面皮な甥おいは、すこしばかり目が出ると、今戸の浜金の蓋物ふたものをぶるさげたりして、唐棧とうざんのすつきりしたみなりで、膝を細く、キリツと座つて、かまぼこにうにをつけながら、御機嫌で一杯いただいていた。そんな日にはいやに青い髭ひげだと思つた。

この男、晩年に中氣ちゆうきになつた。身状みじようが直つてから、大きな俵宿の親方がわりになつて、帳場を預かつていたので、若いものからよくしてもらつていゝといつた。それでも若い衆におぶさつ

て一度逢^あいた^いからと這入^{はい}つて来た時に、みぐるしくはなかつた。大きな男が、ろれつの廻らぬ口で何か言いながら、はいはいした顔を出した時、みんなびっくりした。

「お前なぞ、そんないい往生が出来るなんて——よく若い者が面倒見てくれるな。」

父がそう言^いうと、

「全く——裸で湯の帰りに吉原へ女郎買^いにいったりした野郎が——全く、若いものがよくしてくれます。」

と言^いつた。逢^あいた^いいにも逢^あいた^いかつたが、世話になる部屋の若い者に礼をしてくれと頼^{たの}むのだつた。

さて、

イツチク、タイチク、タエモンドンの乙姫おとひめさまが、チンガラ
ホに追われて――

などと、大きな声で唄うたいつれていたアンポンタンも小学校へあが
る時季が来た。そのころは勝手なもので、六歳でも許したものだ
った。尋常代用小学校といつても小さく書いてあるだけで、源泉
学校だけの方が通りがよかつた。重おもに珠算しゆざんと習字と読本だけ、
御新造ごしんぞさんも手伝えば、お媼おばあさんもお手助けをしていた。

引出しが二つ並んでついた机を松さんが担いで、入門料に菓子
折を添え、母に連れられて学校の格子戸をくぐつた。先生は色の
黒い菊石あばたづら面で、お媼さんは四角い白つちやけた顔の、上品な人

で、昔は御祐筆ごゆうひつなのだから手跡しゆせきがよいという評判だった。御新しんさんはまだ若くつて、可愛らしい顔の女だった。

格子戸をはいると左に、別に障子を入れた半住居の座敷があつて、その上の二階は客座敷になつていた。先生は怖いこわから大変年をとった人だと思つたが、多分三十位だったかも知れない。お媼さんは先生のことを秋山が秋山がと言つた。

翌日からみんなと机をならべるのだつた。お昼すこし前になると、おみやげのお菓子を配つた。今朝登校のときに松さんがもつて来た大袋四ツが持出されて、うまい具合に分配されてゆくのだつた。世話やきの子供が幾人かで、全校の生徒の机の上に、落雁らくがを一個二個ずつ配ると、こんどは巻せんべを添えて廻る。そ

の次は瓦煎餅かわらせんべという具合にして撒まききるのだ。

母の覚え書きがあるから記しておこう。

おやすてならい
於保手習初メ

金五十銭に砂糖折

外ほかに子供衆へ菓子五十銭分。

そのほか覚。

一月年玉分 五十銭

七月盆 礼 五十銭

試験 七十銭

月謝 三十銭

年暮 玉子折

年玉

五十錢

外に暑寒

なんと安価なものではないか。しかし、お豆腐は一丁五厘^{りん}であつたのを、お豆腐やの前で読んだから知っている。お米のねだんは知らないから書くことが出来ない。

試験が割合にかかるのは、試験ということは学校へお赤飯を食べにゆくことだと思つたほどだから、お手数^{てかず}だつたと見える。近所の小学校の校長たちがむずかしい顔をして控えている前へいつて試験されるので、なるべく級の中から出来そうなのが前の方にならび、他校^{よそ}の校長の眼の前でやった。前々日に下ざらいは出来

ているのであるが、秋山先生の弟子煩悩ぼんのうは有名で、自分の方が終日ハラハラしていた。みんなその日はめかしていった。三枚重ねを着て、さしこみのついでにいる鼈べつこう甲かんざしの簪や、前がみぎしをさしている娘は、褌つまを折返してキッチンと座っていた。男の子は長い袖の黒紋附の羽織、袴はかまを穿いていた。

黒いぬり盆へお赤飯とおにしめが盛りつけられた。出来ない男の子は、食べてしまうとそつと釣にいつて、いつまでも帰って来なかったりした。校長さんたちの分は、大皿のお刺身などがとつてあつた。

洋算などは、大概なところで秋山先生が一人に答えをいわせ、「出来たか。」

というとなんが手をあげる。それで済みなのだった。他の老^{よそとしよ}人の校長などは居ねむりをしていた。

暮^{くれ}のお席書^{せきが}きの方が、試験よりよっぽど活気があった。十二月にはいると西^{にし}の内^{うち}一枚を四つに折ったお手本が渡る。下の級は、寿とか、福とか、むずかしくなると、三字、五字、七字——南山寿とか、百^{ひやく}尺^{しやく}竿^{かん}頭^{とう}更^{さら}一^{いつ}歩^ぽ進^{すすむ}とかいうのだった。

課業はすっかりやめてしまつて、その手習にばかりかかる。そしてお墨すりだ。

——あたしのは丸八の柏墨^{かしわ}だ。

——あたしのは高木のいろは墨だ。

——だめだ、いろは墨は、弘法様のでなくつちやいけない。

そんな事を各自てんでに言つて墨を摺する。短かくなると竹の墨ばさみにはさんでグングンと摺る。それを大きな鉢に溜ためてゆくと、上級の子がまたそれを濃こく摺り直す。

——こうやると好いい香においになる。と梅の花を入れる子もあつた。早く濃くなるようにと、墨をつけて柔らかくしておくものもあつた。

——ばりこになるよ。とそれを嫌がるものもある。

しょうか

商家の町なので年の暮はなんとなく景気がよい。学校へも、

お砂糖の折だの、みかんの箱だの炭俵だの、供餅おそなえだのが沢山もちこまれる。お席書がすめばその日から休みで、かえりには蜜柑みかんがもらえる。

二枚書いて、一枚は学校にずらりと張りつけ、一枚は家へもつて帰る。親たちは、居間や、客間や、または、あたしの家などは玄関へ自慢で張る。

この秋山先生も書もらしてはならない人だ、学校そのものもまた！　そして年の暮のことどもも――

柏墨の「丸八」は大伝馬町三丁目の老舗で、立派な土蔵造くりの店だった。紀文に張りあつた奈良奈の家だのなんのときいていた。おおみそかぞうし「大晦日草紙」とかいつたように覚えていたが、くさ双紙に、若い旦那の色里だんな通いいろざとを、悪玉がおだてている絵があつて、お嫁さんが泣いているのを見たとき、丸八の先代のことだとかい

った。後に、春の絵の本を見たら、香字という大^{だい}尽^{じん}に張りあう高総という大尽のことがあつた。それも多分「丸八」のはなしだとかきいていた。その事實は知らないがとにかく、そんなにまで豪奢^{ごうしゃ}な、派手なことがあつたうちと見える。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年2月

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

2012年5月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

旧聞日本橋

蕎麦屋の利久

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>